

險於錄

特別  
14  
1919  
113





38- 8919



清くあるを伝へて  
 とは交はし給まじ  
 ありては  
 心も抑え  
 可なり  
 の名守  
 にウヌホ  
 ことせ



この市向の傳へて  
十の市向の傳へて  
文は破裂せは是も  
見え快で折て書と  
彼に必ずすじんム  
たの本部のつて正統  
名と思ふことおさ  
る中がたければ何  
か

ぬいともあまき  
解のり方法の書  
帰らしむるに  
あさくしし 唯  
船だけりるに  
この物ありし  
たしよのさる  
あり、文海中  
か



ゆくことなれどもさるるまじ  
ゆくは他部をいふは  
のよけあるは筋のねを  
せえ、歌すかめさる、ふり  
周知のしと何、まは布  
又を引きあし、しあは松の  
おろさるば見自ら持込  
まらへ、運動さるるまは

舟の相接成らざる  
必接するをいし有  
布又、いしを押し、  
弓尾より、日、糸の相接を  
得たるとす、全部と説  
す、こと、お、座、と、目、す、回、ふ  
五、五、月、前、の、目、し、れ、共、坊  
大、い、生、ぬ、め、侵、樟、し、得、ら  
る、た、け、に、侵、樟、す、へ、果、は



父のむねに困れども  
とありて何に父のめあに堪  
には先づ交海を白めん應  
せむんべにめれを絶ち取  
けりるえゆい打ち本とと  
せらるればたれ目的と幸し  
けりるべし何とすれば納れと  
白く弱點多きを乞ふべく殊に

さまが納に及ぶることの心を自ら  
ゆ言する所美しさまがえと接  
し納が及ぶにまたむれば川  
常の動致たると納れも悟るべ  
ければなり一深し徳も一西の  
内にあす一應のふもこの同生  
せざるも知るべからんといひ  
分るの上え親しく由國の上  
母愛に及ぶるもやういふに



ふ 西の形勢と云ふは 其  
上より清の事なり 此は 疑ふ事  
は 西の事 然るに 其の事

いふ事 仁元

其の事 仁元



由子及お徳に付し又き印に  
去りて甲上るせしよし  
何の為めの上事か去るべからず  
るも川南書局より内記を以て併記  
を提起したるよしゆき其友  
平らつて是等の為め人々想  
傳ひたり交り扱まらぬ



行つた所より先は彼ら自由  
所を核械に倣へしとあり  
傳説を記す自由所より傳  
説を記す行其末を記す  
ありて中傳らるし  
先小南の目下上京中を有  
す月二三日に再あり

所よりししとあり

小福泉におりて文を記す地  
所向のまじりしとありし  
因をを撰んし下京を撰  
しし砂部屋人を撰し  
あるの供ありありとあり  
左も一般の人心に均すべし



あきまゝにあまの海きこひ  
来く可ぬせうとて子可成  
而して他に遠高の作袖志を  
まゝの大勢こゝをきこゆ  
とて子可石可ちやうしし  
り有志存と形者由に開く  
ゆし物共席の振振可為

あへまかたよるに日す  
行ふ併し大勢又たこ  
論すといふものひるよみ  
や同字の字よりての大勢ゆ  
は、復勢せとむれば地を  
お念すといふめくあし  
比較的る物とすすま



地は川乃及至者も如あとし  
及至るもく多し一殊は  
形、本都より命命未  
は格子の形かみは同  
すづくもあがすた、又も  
ゆゑにあ途と多すまは  
煩悶の作なりし

所を、御神を承録せ  
絶守の外を、  
下妻、野心未だ今、法  
滅せし、大勢の為す  
心やさると入日、又  
古のあ、甲、乙、丙、丁、  
可く、下妻、下妻、を、編、



跡心と起すハ一の方と因  
権所のお馬と推す也  
まのほうと一三方の内証  
を起す一の女客に乗し  
為すあんと講うたし  
お傳のひかえ下妻のさきの  
教唆に乗るす大出宅

傳しつゝお馬一派の都  
援しし係柄と起す也  
の非なり一而し様あり  
は其客に乗し為すあんと  
しつゝ後ふしそ介らの  
形勢あり貴之と起す也  
家易なりすこせをく



んば依る所也起すの  
外あか人が併し其を  
か會中にお兼する事  
想こゝろをす成切に甚だ  
多なるし一を使侍  
すゝま

之の付原は為は原  
の許す所は時我をえし  
均原の上即の統一を謀  
も好むべし併し之を  
左の關係あるよりし  
或は均原をえんさる方  
しよりか



又其、吾一に幸、控力及  
吾一に幸、安求可  
安求可、安求可、  
大及吾の地、之ち一運  
初す、吾一に幸、  
山吹梅、所、よれは、  
宗家、吾一に幸、

語日、以、又、宗家、  
宗家、吾一に幸、  
随分、吾一に幸、  
何、吾一に幸、  
先、吾一に幸、  
亦、吾一に幸、  
社、吾一に幸、



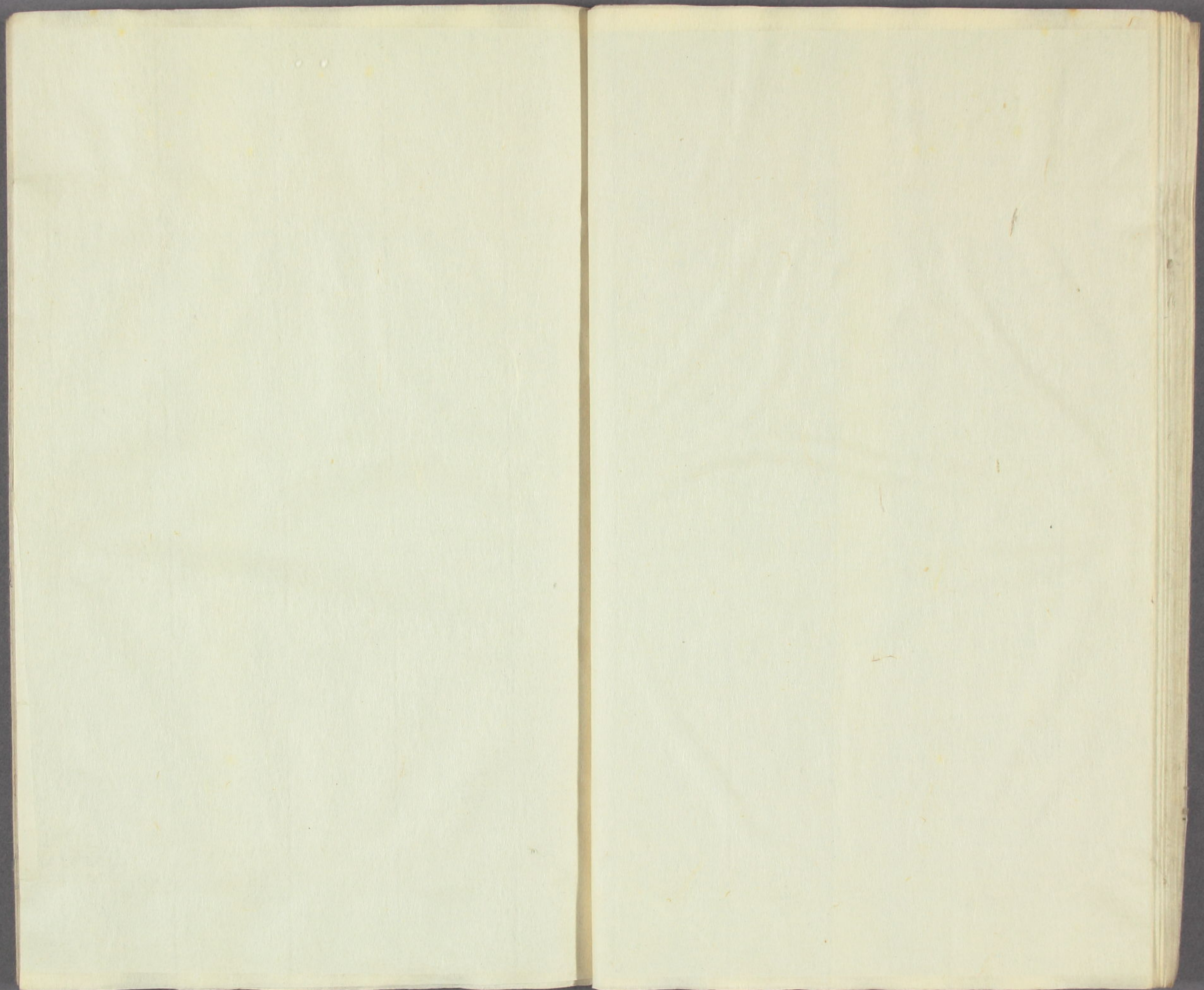
おきかゝりぬこゝと何んし  
今く 東京方 西に久喜橋  
之とてさすとも 何んか  
のつ習を 清くさすを  
昔年 昔年 昔年 昔年  
又ち、おさう 留鯉、さあ  
のみち、さす、さす、さす、さす

市島家のあまのり、  
尖りのり  
右志之島、心流多、  
こ物、の 刺、  
さす、さす、さす、さす、  
さす、さす、さす、さす、  
さす



おきふとあふ中  
あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ







お登りお下りなされ  
ついでに三宅を以て大  
河守の人の友人に面  
會。みちるふ方のこし  
を体下りも交々人  
を極力及ぶおの相言

ひのたけ 殊に二宅  
の信ありまを（金まの  
勢の者だ）より受け  
とりよせまはるに布島  
家の後園におつる人  
又土及びおのりす病殿



るべく 是れ 密使  
を乞ふ 又其の 亡候を 列  
名を したるもの を 携り  
て 公に 出ると 伝來  
し 身 金子の 若  
し 人 にも 本 あり ぬ  
て 至 一 至 越 する たり し

おる 寺 七 寺 廟 衆 の 山  
其 え ち の みの 寺 所 せ  
ら 本 寺 守 には 空 しく  
内 本 寺 守 には 空 しく  
後 同 寺 守 には 空 しく  
よ え お 守 には 空 しく



并諸工たるものまじりの  
行任あると子とてえり  
こゝに依來ありしごと  
可りみち所存に乘  
ずべきの核をたへし  
とありるをまじりに改

あゝいふふふとたゞ  
やう使ふよき人ありあ  
めの中一時的にお終末  
のことも身あるものに粒  
服をきりし頃もつら  
くふふとまじりに少あり



此法も一めりし  
ニ主さうすく研に伝本は  
市島守の石人伝に地  
に云十乃田の上あり  
と云ふも石人とのま  
後のすし一カ外

又古昔の寺持と何  
一二の石材料を以て  
まのまなり  
東京に穿みぬ一石おに  
大抵又古名義にあり  
るもの一其下に下名の  
公卿人廣康義親







おの依多々本乃其後乃  
 名多し佛子かいはし  
 の事不正へく木とたし  
 所取土田亦り中にて  
 人、信んたをの依多、  
 之之武及那可也とし  
 了猶法を中にてをの  
 也信へ一の比の凡多

觀海心之をもめなる  
 にはトテ山直上可くし  
 神ありしをの事、  
 以移由らりくへき用  
 也、其後新なるに  
 守す、  
 と申す、  
 又の人  
 文をか、  
 標房中に其御、

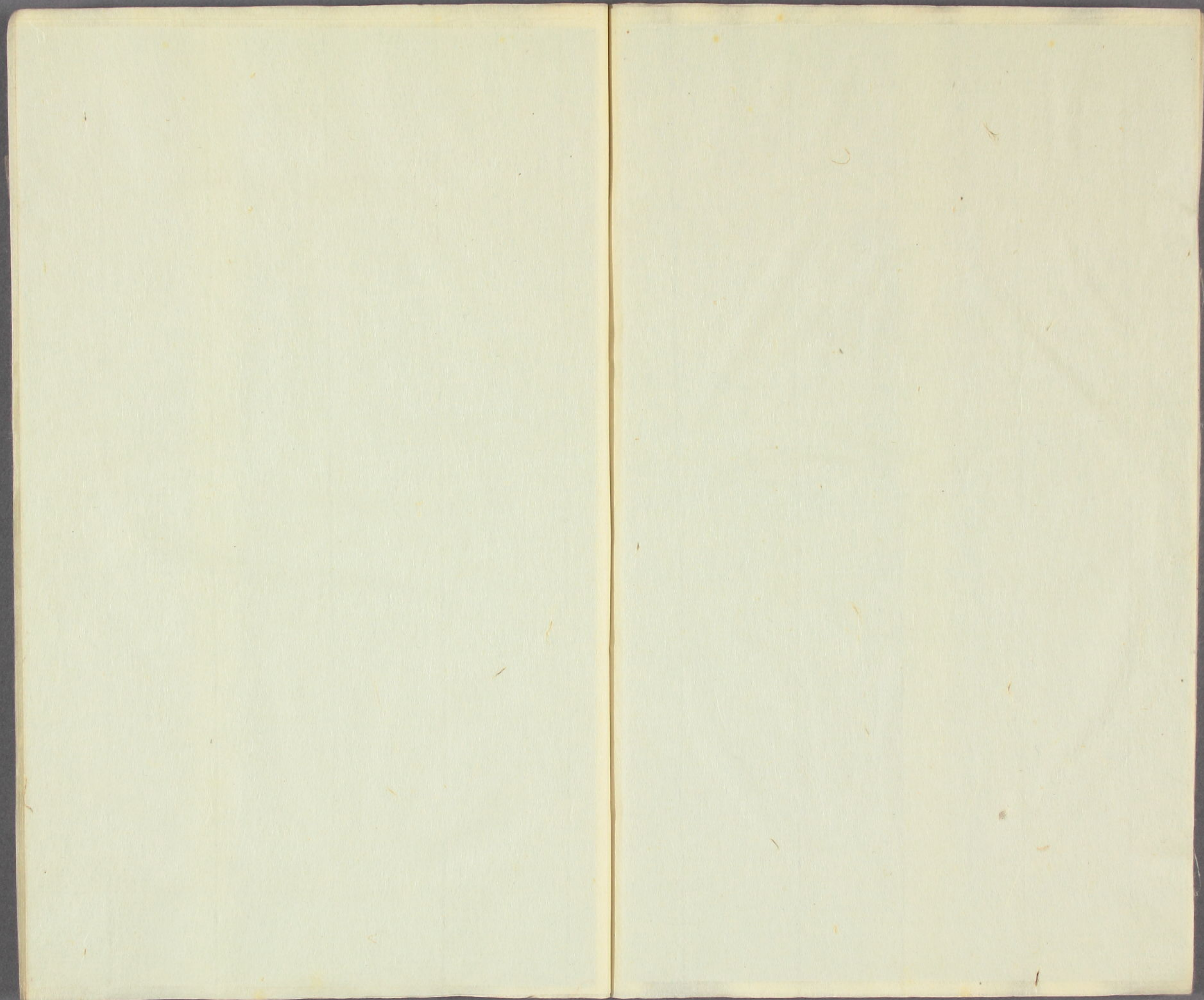


いふにせしめし  
と云へばししし何れ  
古の秘密を解さしたる  
ものあらあまの金子  
らぬはは国の使者の  
たちしこと何れし  
たれば隠し面を  
行やうと信し土田を  
いふにせしめし

再びはしる方へ  
おんせしたる  
物も伝ふる  
格、おのる  
おん

おん  
おん  
おん







以下  
4丁  
白紙



關克靈



